

日本細胞生物学会 将来計画委員会 答申

平成27年8月25日

日本細胞生物学会

会長 貝淵弘三 先生

日本細胞生物学会将来計画委員会

委員長 濱崎 洋子

日本細胞生物学会は、平成26年9月1日の法人化を契機に、将来の本学会のアクティビティをより高いものにするための検討を進めるべく、平成26年10月25日の理事会において、貝淵弘三会長の諮問委員会として「将来計画委員会」を設置しました。これまでに、2回の委員会と委員間のメール交換によって、下記1) 2)につき、鋭意検討・議論を重ねた結果を取り纏めましたので、答申いたします。

1) 魅力的な大会運営および会員数増加のための提言

2) CSF への投稿数増加とインパクトファクター上昇のための提言

将来計画委員会

濱崎洋子（委員長）	京都大学大学院 医学研究科
青木一洋	京都大学大学院 医学研究科
池ノ内順一	九州大学大学院 理学研究院
石原直忠	久留米大学 分子生命科学研究所
榎本 篤	名古屋大学大学院 医学系研究科
小根山千歳	愛知がんセンター研究所
五島剛太	名古屋大学大学院 理学研究科
後藤 聡	立教大学 理学部
佐藤 健	群馬大学 生体調節研究所
長谷耕二	慶応大学 薬学部
原田彰宏	大阪大学大学院 医学系研究科
藤田恭之	北海道大学 遺伝子病制御研究所

（12名）
順不同、敬称略

第1回会合

2014年2月21日 午後2時－5時
於 名古屋大学医学部

第2回会合

2015年6月30日 午後7時30分－9時
於 タワーホール船堀 406会議室（第67回細胞生物学会大会中）

会合以外にメールによる活発な討議を行った。

目 次

1. はじめに
2. 魅力的な大会運営および会員数増加のための提言
3. CSF への投稿数増加とインパクトファクター上昇のための提言
4. まとめ

1. はじめに

日本細胞生物学会は、規模は決して大きくないものの、第一線の幅広い分野の研究者が多数在籍する、サイエンスのレベルは極めて高い学会である。また、若手が自由に発言でき、いわゆる大御所の先生との距離が近い、といった本学会の特色は、多くの学会員が認識しているところである。しかしながら、会員、特に若手会員の数は近年顕著な減少傾向にあり、2014年の大学院生の大会参加は25名程度と全参加者数（491名）の5%程にとどまっているのが現状である。また、学会誌（CSF）への投稿数も減少傾向にあり、学会員数減等少に伴う収益減により財政状況も年々厳しくなっている。こうした傾向はどの学会も同様で特別視するものでないという考え、あるいは若手が本当に必要なのか？という意見など、“そもそも論”もあろうかと思われるが、学会のアクティビティを維持し高めていくために、財政状況が改善されること、また優秀な若い人材の継続的な加入が必須であることは、誰もが認めるところであろう。

本学会ではこれまで過去2回、「将来計画委員会」なるものが設立されており、現在細胞生物学会大会の名物として定着した「若手発表賞」は先代の委員会の発案によるものである。今回委員長を仰せつかった濱崎を含め委員のうち何名かはまさにこの賞をきっかけに本学会に加入したメンバーであり、委員の中には必ずしも本学会に長く貢献してきた老舗ラボ出身ではない研究者も多い。この人選は、まさに貝淵会長の「分野外から将来性ある中堅・若手人材を呼び込み活性化する」、また「先入観なくアイデアを出す」、という意思の表れであろうと理解している。本委員会はこの点に鑑み、変えないことも一つの選択肢であることを理解したうえで、諸先輩方が築かれてきた本学会の素晴らしい点を継続しつつ、各々の立場から、本学会の魅力は何か、学生をより積極的に参加させたい学会に変えていくにはどうしたらよいか、という視点に立ち、具体的な方策を提案することとした。

2. 魅力的な大会運営および会員数増加のための提言

1) 学会を取り巻く昨今の状況、大会参加者減少の原因として考えられる理由の分析

まず、学会員、大会参加者減少の原因としてどのようなことが考えられるか、現状把握と原因について、委員から以下のような意見が寄せられた。

「通常、著名な外国人スピーカーを招聘するシンポジウムは学術集会の1つの目玉であるが、財政状況が厳しい学会にとって財政的負担は極めて大きい。その一方で、COEプログラム、特定領域、新学術領域といった大型プロジェクトや理化学研究所など大規模な研究所が主催する国際シンポジウムなどにおいて、外国人スピーカーを招聘する機会が増え、学会の大会で同様のことを行う意義が以前に比べて薄れてきた。」

「学問の細分化に伴い、領域の特化した学会や研究会が増加した。これに伴い、元来幅広い事象を研究対象とする、細胞生物学会の特徴が特に見えにくくなってきている可能性がある。」

「研究者がすべき仕事は明らかに増加しており、限られた時間の中で、必要な（行く価値のある）学会にだけ行く、という傾向が強くなってきている。」

「分子生物学会でさえ若手会員が減ってきているのが現状であるが、学生間の同窓会的な意味で（それでよいのかという議論はさておき）依然、学生からの人気は高いとも聞く。一方、温泉地で学会をするなどして、学会員同士の密な交流を促進したことにより、会員数が減り続けていたところから一気に復活した例（神経化学会）もある。」

以上の点から、外国から大物スピーカーを呼ぶ、というスタンスでは、今後は人を集められないだけでなく、財政的負担になる可能性が高いと考えられる。また、学会としての特徴が見えにくい、という点もネックになっている可能性がある。このサイズと、何でも気軽に議論できるという歴史的な特徴を生かし、人的な交流を盛んにする、あるいは若手を育てる、といった学会としてのコンセプトや存在価値を、これまで以上にはっきり打ち出していくことが必要ではないかと考えられる。

2) 学会員（特に若手）増加、大会参加者増加のための具体的方策

ほとんどの場合、大会への参加が学会員になるきっかけとなる場合が多いことを考えると、会員増加のための第1の方策は、魅力的な大会することであると考えられる。一方、いくら若手にとって魅力的な学会や大会になるように工夫しても、例えばそれによって学問のレベルが下がるようでは、中堅以上の研究者が離れて行くことになる可能性がある。また、上司（PI）や関係者が所属していない学会にいきなり若手や大学院生が入会することはまずない。近年、中堅やベテランが細胞生物学会から離脱している事例も見受けられ、そのような離脱が今後は増えないように工夫していく必要もある。つまり、若手会員の増加のためには、まず中堅やベテランが細胞生物学会を魅力的と感じ、若手に会員になるように勧めたいと思われる学会であることが本質的に重要であると思われる。

この点と先に指摘した現状分析を基礎とし、本委員会は表題の目的のために、特に大会に関連した以下の具体的な提言を示すものとする。

① 若手や中堅、異分野の目立った研究者をオーガナイザーに選ぶ「公募シンポジウム」の枠を広げる

シニア研究者（大御所）でなくてもシンポジウムのオーガナイザーの機会がある、という方針を明確にし、他分野の中堅の参加を促進する。特に留学から帰国して間もない activity の高い研究者や最近目立った仕事をされた若手の研究者等に大会のシンポジウムのオーガナイザーをお願いし、新会員になって頂く。「公募シンポジウム」の枠を広げることでこのような機会を増やし、細胞生物学としてのコアな部分も守りつつ、時代にあった最先端の、あるいは疾患なども含んだ多様なテーマを積極的に取り上げていく。一方で、他分野から採用されたシンポジウムオーガナイザーやシンポジストには、細胞生物学会中のシンポジウムであることに鑑み、レベルを保ちつつ専門外の人も理解できる工夫をしていただくよう、大会側からお願いしておくことも重要である。

② 学会、大会のコンセプトを明確に打ち出す

先に述べた通り、学会も選ばれる時代になり、学会としてのスタンスを旗幟鮮明にすることも重要であろうと考えられる。細胞生物学会の規模や、雰囲気、歴史から、細胞生物学会が重視する「議論重視」「人的交流」「若手育成」をわかりやすく伝えるキャッチフレーズをHPや大会で明確に打ち出し、大会においてそれを実行する。別紙に、本委員会の委員、および第1回細胞生物若手の会の事務局長から上がった案を添付した。以下、③議論重視、④人的交流、⑤若手育成、として各々について述べる。

③ 議論重視

A. ポスター会場の活性化

シニア研究者であってもポスター発表をする、あるいはポスター会場をみてまわって議論に参加している、この雰囲気は、他の大きな学会にない細胞生物学会の素晴らしい特徴であ

り、若手にとっては大いに魅力的である。またシニアにとっても、将来雇いたいようなよい若手を見つけ出すよい機会にもなる。この流れをさらに促進・定着させるために、会長や大会長から、例えば理事・代議員の先生にも、ポスター会場への参加をメール等で周知して頂く。

B. 言語について

昨今、日本人の英語力は確実に上がってきており、英語による議論も無理ではなくなっている。一方で、質疑応答も含め英語、という学会は増えてきており、英語化というのは特段の特色にはならない。また、このような学会では実際の所、あまり議論が盛り上がっていないのが現状であると思われる。こうした点からすると、本学会のスタンスとしては、基本的には日本語で行い、外国人スピーカーがいるシンポジウムは英語で行う、という形が適しているのではないかと思われる。

C. シンポジストにもポスター発表をお願いする

本委員会での提案を受けて、東京大会ではシンポジスト（公募演者）にポスター発表も行っていただいたところ、演者と直接話ができると好評であった。今後以下の点も考慮して、このようなシステムを継続すべきであろう。

- ・ 指定演者（invited speakers）にもポスター発表をお願いするのも一案である。非会員の場合は難しい場合もあるかもしれないが、学会員の場合にはデフォルトでお願いすることにしてよいのではないか。
- ・ ポスターをわざわざ作成するのではなく、発表スライドから抽出して印刷したものでも差支えないことにすれば、負担も減るのでないか。
- ・ シンポジストのポスター発表用のコーナーを別に設けて目立つようにする。

④ 人的交流

A. Science discussion table/Round table プログラムの設定

第一線の研究者と若者が、ある程度密に、かつ気軽に話せる機会として、ランチョンなどの時間に設定する。ASCB や EMBO meeting がモデルである。これにより、院生や若手研究者が、第一線の研究者に、研究に関する疑問や進路相談等もできる場を提供する。この案は、佐藤健委員、大会プログラム委員長により、今回の東京大会（第 67 回日本細胞生物学会）で早速試行された。以下にその佐藤委員からの報告を記載する。

——大会 3 日目に第 1 回ラウンドテーブルディスカッション「細胞 x 飯」を開催した。約 70 名の参加者があり、各テーブルとも会話が弾んでいた。AE 企画の目黒さんによると同様の企画をした某学会ではほとんど参加者がおらず低調で、それに比べると非常に盛りあがっているとのことで、まずは成功かと思われる。今回は時間の制約上、ランチョンセミナーと同時刻にラウンドテーブルディスカッションを行うこととなった。同時刻に開催される企業ランチョン、男女共同参画委員会企画の参加者を吸収することを避けるため、敢えてお弁当代を有料（700 円）として販売を行った。ラウンドテーブルディスカッションの方に興味が

あったが、お弁当が有料だったので他の会場に行ったとの声もかなりあったので、潜在的にはもっと参加希望者がいたものと思われる。弁当代を払ってまで参加したいという人は実はそれほどいないのかもしれないし、こちらに人が流れすぎず企業ランチョンと良いバランスとなったと言えるかもしれない。予算に余裕があれば、学生無料とするのがベストかと思われる。また開催する時間帯も企業ランチョンとの関係を考慮し、今後検討が必要かと思われる。また、シンポジストに、ラウンドテーブルディスカッションをお願いしてもよい。時間帯や場所の設定が問題となるが、すべてのシンポジストではなく、例えば初日の午後と二日目の午前中のシンポジウムの講演者に限ってお願いするなどの方法も考えられる。

B. シンポジウム単位での人的交流

シンポジウムの後に、オーガナイザーとシンポジストが、シンポジウム参加者(若手含む)を懇親の場に連れて行くというルール(風習)ができるとよい。大会主催者がその旨オーガナイザーにお願いするなどしてもよい。

⑤ 若手育成

A. 細胞生物若手の会

来年度の第67回大会では、中野大会長により大学院生会費無料という試みがなされ、また「第1回細胞生物若手の会」が有志によって企画された。若手が自発的に申し込みをしていた加藤記念バイオサイエンス振興財団「学会等開催助成」からの助成金(30万円)も得られるという頼もしいニュースも飛び込んだ。以下に後藤委員からの報告を記載する。

——当日の参加人数は67名にもものぼり(男性48名、女性19名)、50名による2分間の発表が行われた。大きな会場で発表をし、異なる分野の同年代と接することは大いに刺激になったようで、極めて活発な質疑応答が行われた。また、ご自身の若い頃の話も含めた貝淵会長による特別講演には大変勇気づけられたと、多くの声がアンケート寄せられた。懇親会には多くのPIも参加し、世代を超えて広く交流を促す場となった。また次回の幹事・執行部を募ったところ立候補する学生が多くいたこと、アンケートの結果では半数の人が次回も参加したいと回答したことから、第1回細胞生物若手の会は大成功であったと思われる。

若手の会の自主性を尊重しつつ、この流れを継承するために、今後学会側からは若手研究者育成委員会(現:後藤聡委員長)が、若手の会と、毎年交代となる大会長とをつなぐ形で、できるだけ積極的かつ継続的な支援を行い、学会に付属した若手研究者同士、若手—中堅—シニアの密な交流を促す機会を提供することが望まれる。毎年次期大会長に特別講演をお願いすることで、若手の会の活動を理解して頂くのも一案であろう。

B. 学生の口頭発表の機会を大幅に増やす

ワークショップなどにおいて、学生が口頭発表を行う機会を増やす。短時間であっても学会で口頭発表を行うことは貴重な経験であり、学生が学会に参加するモチベーション向上にもつながるとと思われる。レベル低下を招かないために、一定の枠を設ける形も一案である。ただし、若手の会が継続的に若手研究者の口頭発表のよい機会となるようであれば、この点

は現状のままとし、ポスター会場でより議論を重視するというスタンスがよいと思われる。

⑥ 技術講習会（のようなもの）を開催する

企業や学会主催の有料テクニカルセミナー・技術講習会が、主に大都市でしばしば開催されており、それなりに人気が高いようである。学会にこのような機会が併設されていれば、学会へ行くモチベーションがより高まるという地方大学の研究者は多い。例えばスポンサー料を通常のランチョンより安く抑え、機会と時間と場所を提供することによって企業に対してもメリットをもたらす。その分、講習会への参加費も通常より抑えて頂くことが可能になれば、大会参加者にとって魅力の一つになりうる。同時に、学会にとっても収入と大会参加者増という効果が期待できる。

⑦ 学会の開催場所として大学内の施設を積極的に検討する

複数の会議場を備えた大型建物を持つ大学が現在は多数存在し、規模的に本学会の開催は十分に可能であると思われる。ホテルや会議場で行うより明らかに使用料が安価であり、学会の財政にとって大きなメリットがある。

また大学内の施設で学会を行えば、その大学の異分野の研究者が気軽に足を運ぶことも可能であり、参加者・学会員の増加につながる可能性もある。

⑧ 共催を増やす

これまで、発生生物学会と4年に1回程度の頻度で共催を行ってきた。今後可能であればよりフレキシブルに、大会長の裁量でいろいろな学会とその都度、共催を組むというスタイルを推奨していく。様々な研究分野との交流が可能になり、かつ開催費の削減が期待できる。

⑨ 各大会の記録等の継承

各大会の収支、アンケートの実施・集計は行っているが、それを有効に活用していく仕組みが必要である。大会運営はほとんどの人にとっては初めてで、かつ膨大な労力のかかる仕事である。これまでの大会でよかった点、反省点、工夫すべきと思われた点、問題点、などを、例えば事務局サイドで記録・保管し、次の主催者に継承する仕組みを作るべきであろう。現・次期大会事務局が会合をもつ機会があってもよい。

⑩ 医学部の臨床系にも宣伝を行う

基礎的なサイエンスをもっと知りたい、自分が対象としている疾患について、基礎の専門家に相談したい、という臨床系の研究者は意外と多い。これらの研究者をターゲットとして、臨床の学会でチラシを配るなど、大会をもっと売り込む。勿論、彼らが議論に加わるような雰囲気、発表の組み立てにすることも同時に重要である。

⑪ キャリアディベロップメントに関する場を提供する

PI が大学院生、ポスドクをリクルートもできる場、あるいは若手が次の職場を探せる機会、場（キャリアセンター）を提供してもよいのではないかと。

⑫ 若手優秀発表賞の対象者の再考について

現在の審査対象（38歳以下、演題の筆頭著者）では、書類選考通過者・受賞者が自ずと助教やポスドクになってしまい、学生にチャンスが無くなっている。若手発表賞は、大変よい形で定着してきているが、今後よりよい賞として発展させていくために、賞の趣旨を再度確認・議論し、審査対象、審査方法を再考する必要があるのではないかと。この点に関し、委員から出されたいくつかの案を下記に挙げる。

- ・ 受賞者に2名程度の学生枠を設定し、必ず学生が入るようにするのも一案である。
- ・ 発表賞であるので、学生枠を設けずあくまで内容重視の評価のほうがよい。ただし年齢設定ではなく、審査対象を学位取得後3年まで、と設定するのも一案である。
- ・ 学生（学位取得前）と学位取得者以上で別々に若手優秀発表賞を設定する方法もある。

⑬ その他

大会参加者増のためではないが、HPの広告を増やすことで収入増、大会での企業ブースのスタンプラリーなどを行うことで、参加企業が増えるのではないかと、会議や選挙などは極力インターネットを使うべきではないかという提言もなされた。

3. CSF への投稿数増加とインパクトファクター上昇のための提言

1) 学術雑誌を取り巻く昨今の状況、大会参加者減少の原因として考えられる理由の分析

本学会の英文論文誌（Cell Structure and Function, CSF）は、オンライン化、掲載料無料化という試みを早くから行ってきた先駆的な雑誌である。紙媒体からオンラインに変わり予算負担は軽減したものの、現在でも年間250万円程度経費としてかかっており、支出の大きな割合を占めている。今年は幸いにも学会誌の運営に使用できる科研費が獲得できたものの（250万円）、昨今の状況から、必ずしも継続的に期待できる状況ではない。

このような背景と、ある程度雑誌の地位が確立したこともあり、昨年9月有料化に踏み切った。ほぼ実費で1報あたり10万円ほどであり、他のオンラインジャーナルと比較すると安価ではある。また、掲載まで早いという安心感、インパクトファクターの安定性、論文賞などは学会員にも評価されている。しかしながら、有料化前からすでに投稿数・採択数共に減少傾向にあり（資料2）、また近年多くのオンラインジャーナルが発行され競争が激化している。雑誌の質を保つために安直な採択は避けなければならないが、財務改善のためにもまずは投稿数の増加が望まれる。

2) CSF を魅力的な雑誌にし、投稿数を増加させるための具体的方策

① 総説を載せる

総説があると引用の頻度は自ずと増える。若手賞受賞者などに依頼するなどして一定数確保していくのも一案である。

② 短報の項目を設ける

Full paper になるほどの図の数は無いが、重要な、質の高いデータなので報告しておきたいような数個のデータからなる Brief communication のような短報を受け付ける。

③ アブストラクトの英文校正は学会で責任を持つ

英語の質に問題がある論文が一部見受けられるとの指摘がある。雑誌として信頼されるためにも、アブストラクトは学会で責任を持って英文校正を行うことも検討する必要があると思われる。

④ 積極的に宣伝する

異分野からの投稿が増えるよう、他の学会の学術集会でもチラシを配るなど宣伝をする。学会員に改めてメール配信して投稿規定、受け付ける論文の形態などを周知する。

「Technical note」の投稿も受け付けているが、ほとんど投稿がないのは、単に知られていないという可能性もある。（実は Short Communication という規定もあった。しかし単に

長さの規定のみ)

* 本項目に関しては、本委員会にて議論の途中、6月13日(土)の幹事会・理事会において、CSFのワーキンググループ(委員長を吉田秀郎先生(兵庫県立大学)、委員は貝淵会長、大野編集委員長に加え、原田彰宏先生(大阪大学)と福田光則先生(東北大学))が発足し、主にこちらで議論することとなった。

4. まとめ

以上、本委員会での議論をもとに、日本細胞生物学会が未来に向けて発展するための具体的な方策について提言した。

現状の最大の問題点として、学会員数の減少、財政難が挙げられるが、本委員会はこの課題を、これまでの大会コンセプト、学会の雰囲気の良い点を残しつつも、時代と現状に必要な変化を以て解決していくというスタンスに基づき、具体的な提言を行った。

その結果、第67回細胞生物学会大会中に下記3つの企画の実現と企画の活性化に貢献することが出来た。

- ・ラウンドテーブルディスカッション（細胞 x 飯）
- ・細胞生物若手の会の開催
- ・シンポジストにもポスター発表をしていただき議論を深める

今回の提言の中でも特に、以下の点を念頭においた方策が日本生物学会の発展に重要であると考えます。

- 1) 「上下・分野の垣根のない活発な議論」、「人的交流」、「若手育成」を本学会のコンセプトの柱とする。
- 2) 大会をより魅力あるものにすることで若手をリクルートすると共に大会収入を増加させること、CSFの掲載数を増加させることを、政状況改善手段の柱とする。
- 3) 異分野の学問・人を積極的に取り込むことで、学会の活性化を目指す。

以上

別紙)

日本細胞生物学会のHPや大会等に使用するキャッチフレーズ (案)

- ・ 君の研究(はなし)を聴きたい
- ・ 議論は熱く 世代と分野の垣根は低く 志は高く 主役は君だ！ 細胞生物学会
- ・ 細胞生物学が熱い！ ~ 若手もベテランも侃々諤々、議論百出~
- ・ 今が熱い細胞生物学！ ~ 若手もベテランも開かれた議論~
- ・ 逢う・語る・創る いざ細胞生物学会へ
- ・ 若手からベテランまで・共に創る細胞生物学会
- ・ 日本発・新しい細胞生物学 「ディスカッション」「ふれあい」「ヤングからシニアまで」
- ・ 細胞(さいほう)の熱きおもいを語る知(ち)の 世代(とき)はまじりつ滞(と)まることなく
- ・ 語らうてきを忘るる若人の あつき知力(ちから)は滞(と)まることなく
- ・ 細胞(さいほう)の語りべ集うこの宴(うたげ) 世代(とき)はまじりつ滞(と)まることなく
- ・ 細胞生物学、サイエンス、人生。熱く語り合おう！
- ・ 細胞生物学会の新時代を創る
- ・ 細胞生物学会の新たなる時代
- ・ よみがえる細胞生物学会
- ・ 次世代細胞生物学会
- ・ 新生細胞生物学会
- ・ 情熱の細胞生物学会
- ・ 細胞生物学会の野望
- ・ 細胞生物学会は若手研究者や学生に開かれた学会です。
- ・ 細胞生物学会は若手研究者や学生が自由に発言できる学会です。
- ・ 若手もそうでない人も自由に議論できる学会
- ・ 若手を大事にする学会
- ・ フランクに(ざっくばらんに)議論をする学会
- ・ 上下・分野の垣根なく活発に交流する学会
- ・ 「細胞」に関することなら何でも議論する学会
- ・ 一度行ったらハマる！細胞生物学会
- ・ 議論大好き！細胞生物・温故知新
- ・ 細胞生物から始めませんか